
俊寛三題

鍋木恵梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俊寛三題

【Nコード】

N4721C

【作者名】

鍋木恵梨

【あらすじ】

平安後期、平家が栄華を極めた頃。平家打倒を狙い企てられた「鹿ヶ谷の陰謀」に加担し、平清盛により鬼界ヶ島に流された僧「俊寛」。浄瑠璃や歌舞伎、古典に数多取り上げられた彼を題材に、先人の創作に取材し、三篇の短編をものしてみました。

一、孤島（前書き）

都へ戻る赦免の船が現れたが名簿に俊寛の名はなく、俊寛は悲嘆に暮れる。謡曲「俊寛」より。

一、孤島

俊寛は海の潮を踏み分けて叫んだ。

なにゆえ我のみが残されねばならぬ！

何かの手違いではないのか？

誰か、誰か！

かつて俊寛と同じく平家打倒を共に計りし丹波少将成経、平判官康頼。彼らとは谷水を酒になぞらえ飲み交わし、栄華の昔を忍び、今や鬼界島へと流された身の上を共に嘆いた。島の背後から立ち昇る噴煙を眺めつ、島人と交わり、都の物語りを語ったこともある。

だが今、俊寛は独りである。成経、康頼は赦免され、都へ帰る船に在る。その船影を見送る俊寛の孤影は、やがて夕陽が沈むと共にかき消されていった。

それから俊寛は、毎日、湊へと向かった。

そしてひたすらに地獄絵の如き赤茶色の海を眺め、夢想し続けた。

赦免状は間違いでありました。

貴僧の名もかく有りますぞ。

数少ない島人は彼の身を案じた。ときには慰め、ときには諦めなされとはつきり告げる者もいた。

もう迎えは来ない。

この身滅び、みたまとなりても帰京は許されぬのだ。

絶望の中、俊寛は噴煙立ち昇る岳へ向かい、鬱蒼とした山の中へと姿を消した。そして以後、孤独と読経の日々を過ごし、やがて独

り静かに朽ち果てていった。島人も湊で俊寛の姿を見ることは無かった。

今際のこと、俊寛は虚空に視線を彷徨わせ、絶句した。

「嗚呼……この島に在るは、我のみに非ず」

最期だけは幸福に満ち足りた様子であつたという。

果たして誰が俊寛と共に在ったのか。それを知るは、ただ彼のみである。

二、約定（前書き）

丹波少将成経が妻とした島の海女千鳥は、赦免船に乗ることを許され
ない。三人が同乗を望む中、俊寛僧都がとった行いは。歌舞伎・
浄瑠璃「平家女護島」より。

二、約定

俊寛は浜の砂を見つめ、懷手に考える。

彼は確かに、丹波少将成経が花嫁・千鳥に約したのだ。

「拙僧からお願い申す。どうか少将どのと添い遂げておくれ」

都への望郷の念を抱き恨み辛みを語り合う、心荒ぶ日々。

どれだけ虚しいものか、拙僧も心では分かっておりました。

されどこの口惜しさ、語れずにはおれぬのです。吐き出さずにはおれぬのです……かくの如く悲嘆に暮れる日々を送りし中、少将どのが申されました。好いた女子があると。勝手ながら拙僧は思ったものです。これぞ千載一遇の好機なり、と。島に在りてこそその仕合せを見ゆれば、拙僧もこの島に至った意を見いだせる。この島にて苦しめと、我らを流した清盛の鼻も明かせるというもの。

少将どのが心にお変わりあらば拙僧が諫めよう。きっと比翼連理の夫婦として生涯添い遂げられるよう、拙僧が心を尽くしましょうぞ。千鳥や、今日よりそなたは我が養女^{むすめ}。父のためにも少将どのと……。

涙を拭い、千鳥は答える。

「この祝言はわたくしのみならず、皆さまの仕合せとなるのですね」
そして今、千鳥は嗚咽を隠せない。

祝言が為ではない。赦免船が湊に着いたからである。

赦免副使丹左衛門尉は黙して控え、上使瀬尾は淡々と申し渡す。

「赦免状にあるは三名のみ。いかな申されようと、関所はくぐれぬ」
「そこな千鳥は少将成経が北の方、拙僧が養女。どうして独り、島に残して行けようか」

俊寛は砂上に座して瀬尾を振り仰ぎ、礼を尽くす。

されど瀬尾はただ繰り返す。三名のみが赦免状にて乗船を許されたる者なり、と。

「さればわが身は島に。はいそうですかと、おめおめ都に帰るものか」

「されば私も残ろうぞ。この徒花を枯らす都へはきつと帰るまじ」
丹波少将成経、平判官康頼の流人二人も俊寛同様、浜に座しぎりぎり瀬尾を見据える。その背を見つめる千鳥、とうとう泣き崩れた。

「おやめ下さいまし皆さま。貴きお方がたが、たかが海女ごときに」
俊寛は暗澹たる思いを抱く。

違うぞ千鳥。これはおまえのためではない。皆が思つのは、おまえ独りだけのことではないのだ。

これは我らの……。

やにわ懷手を抜ききり、俊寛は瀬尾へと飛びかかった。俊寛の手は島の陽光を受け入れ、鈍い光を放つ。

砂が舞う。

暗く朱い色が浜を染める。

俊寛の手刃から血が滴り落ちる。足元には虫の息の瀬尾の姿。

「待たれや僧都」と俊寛の腕を掴むは副使丹左衛門尉、「とどめを刺せば僧都の誤り、咎は重なる。今なら喧嘩で済ませられよう。とどめ刺すこと無用、無用」

「この俊寛はそのまま島に捨て置かれよ」

「御辺を残しては行けぬ。三人を都に連れ帰れ、との我らの役目。一人欠けては、関所にて異ありと」

「判官どの少将どの、そして千鳥」俊寛はひげを撫で答える、「これで三人。関所にも人数に不足なし。俊寛は上使を斬り、再び重き咎を犯した。よって改めて流人となし、島に留め置いた。こなたの役目に何の落ち度があるう」

丹左衛門尉が反問する間もなく、俊寛は振りかぶる。

「瀬尾よ受け取れ、恨みの一刀」

遠ざかる船影。

もつと見えはしないかと、俊寛は崖の果てへとにじり寄る。あれに乗ってさえいれば、都へ帰れように。だが海は容赦なく船を隠していく。白い波間にもみ消され、俊寛の未練だけに乗せ、ただ平らかな海へ。

「いずれも愚にもつかぬ身勝手な思いじゃ」

俊寛は肩を落とし、岩肌にこぶしを数度打ちつけた。

帰りたい。独りで島に残りたくはない。

だが、ああせずにはおれなかった。瀬尾や平家に命ぜられるがまま、心を尽くそうと約した女を残すこと。俊寛には耐えられはしなかった。

——どうか、どうか添い遂げておくれ、千鳥や。

茜に染まる海を、俊寛は時を忘れ眺めつつける。

三、双影（上）（前書き）

少年有王はかつて俊寛に仕えた童。鬼界島の俊寛の言葉を伝えるに俊寛の愛姫が元へと赴くのだが。芥川龍之介と菊池寛の『俊寛』をモチーフに。

三、双影（上）

その法師は冷たい海へと漕ぎ出でた。

——生きながらえてくりやれ。

と命じた、幼き日のあるじの姿を思い起こしながら。

有王は物心ありおついてより、童として俊寛僧都に仕えてきた。その年月は十数年を越える。かれのあるじたる俊寛が、平家転覆の謀主とされ、遠き島に流されて久しい。北の方と若君も、失意に世を去った。そして俊寛の家にはただ独り、幼い姫君のみが残された。その姫君も、京極の屋形も鹿ヶ谷山荘もけっしょ闕所に遭いしのち、人手に渡ったあとは、大和に住まう伯母御前の元へと引き取られた。後日、有王は人づてに姫の元を訪ねたが、そのとき、姫の手になる文を託された。

そして一年余の歳月を経る。取次ぎを頼んだ有王は、ひとたびは家の小者に邪険にされた。長者然とした方のとりにしで、どうにか姫との会見を許されたが、この扱いには有王も、一抹の不安を覚えたのである。

物音に有王が縁の庭を振り返ると、几帳の影から艶やかな彩りが見えた。有王は思わず唾を飲み込んだ。

凜とした顔立ちの少女がしなやかに立ち、有王を見下ろしている。あわてて有王は出来得る限り低く、頭を下げた。きぬ擦れの音、次いで、不可思議な芳ばしさが、有王の五感に届いた。

「おもてを上げなされ」

その声はすぐ近くから届いた。わずかに顔を上げる。すると目の前に、かの姫は座していた。有王はあわてて床に頭を擦りつけた。しかしその華やかに過ぎる彩りは、目に焼き付いたままだった。

「鬼界島より吉日、お戻りとか。遠路御苦労であらしゃいました」

「もったいなきおことば」

「有王。おもてをお上げ。わらわに父さまの最期、話してくりやれ」
「では、ご無礼つかまつります」

有王が顔を上げた。姫は目をつむり、有王の話に耳を傾けた。

三、双影（中）

「おお、お小有王か、懐かしや」

御坊は、私の顔を見るなりおっしやいました。不自由な離れ島にありながら、かつて都にあった頃の常と変わらぬご健勝な御様子。

安堵致しました、と私はお答えしますと、御坊は哄笑なさいました。「この通り、健やかに暮らしておる」

そして御坊が手を叩きますと、女が壺を掲げて参りました。髪は赤く短く、目もと鼻筋も深く、色あさ黒く痩せこけた、なんとも評しがたき不器量な女ながら、なんとのう所作に品がござりました。さて、程なくして女が下がりますと、御坊は手ずから杯を取り、島の酒じやと私にお授けになりまして、有り難く杯を取らせていただきました。

「あれがこの島での妻」

御坊はにやりと口もとを上げ、申されます。私は、あまりのことに杯を取り落としそうになりました。

御坊は四十に満たず。離れ島の磯窟に、侘しくひとり寝で過ごされるのは、あまりに無聊なこととは存じます。とは申せ、あのような者と思わず口にいたしますと、

「心根はよいのでな。信じぬかも知れぬが、ひそかに思う者多く、流人に取られたと、さんざののしられたものであるよ」

そう誇らしげに仰しやるものの、納得いかぬ顔を隠さずにおりますと、

「たしかに都様の美しさとは異なるう。されど都人のいう美醜とは、唐天竺の人のとはまた違うのではないか。もしかすると、本朝でも唐もろこしと行き来があった昔は、女の美しさも違つておつたやもしれぬ。今の都だけがこの世のすべてではない。やがて拙僧もそなたも草木の露となり、長い時を過ぎれば、やせ細つた赤い髪でも美しいとされるやも知れぬ」

外つ国のことなど私には考えも付かぬことなれど、言い訳にはあらず、ご本心で申されておることはよう分かりました。さりとて都だけがすべてではないとは、御坊にとつて、奢る平家に辛酸尽くしがたき思いをなさつたのは、遠い過去のできごとなのでしょう。それとも……もしや、都へ還りたくないのですか、とお聞きますと、御坊はためらいも見せず「此処は此処とて」とだけ、申されました。

あとは島の山より出ずるけむりのことや、島の産品、あるいは島にいたころの判官康頼さまや丹波少将成経さまのことなどを、伺いました。少将さまの千鳥なる女と、その男子にも会いました。そうです、あの千鳥でございます。厳島で身を投げたという噂もありましたが、御坊が申すには皆、嘘であると。船に乗せよと言つたのは御坊のみ、肝心の少将さまはいかにせんと、狼狽するばかりであつたそうにござります。別れた頃は毎夜泣き腫らしたとのことですが、私が会つた頃は、肝の据わつた母となつておりましたよ。かの千鳥女は、都にも稀なる美しさでございましたが、あの島では誰も美しいとは言わぬそうでございます。やはり、此処とかの島とは違つたのでござりましょう。

私からも、おひいさまが息災であること、平小松殿が卒されたこと、その遺領をめぐり法皇様が鳥羽殿に押し込められ、関白さまはじめ四十余人の官職を停止せしめられたること、その関白さまがご出家されたことなど、知るかぎりの天下のことなどを、つらつらとお話し申し上げました。島に残りお側回りのお世話を差し上げたいと幾度となく申し上げたのですが、御坊はお許しになりませんでした。

そうして幾月かを過ごし、次の硫黄を運ぶ便船が参りました。私のみが船に乗り帰ることとなりましたので、御坊がいざ見送らんと、湊にお出で下さったのですが、そのおり御坊がおっしゃったことは、

「俊寛は死んだ。独り孤をかこち寂しさを嘆き、世を恨んで果てた。

そう伝えておくれ、有王。されど」

一度目を伏せ、御坊は静かに仰せになりました。

「むすめには、ほんとうのことを知らせておくれ。俊寛は芭蕉扇を片手に、竹林賢者のごとく暮らしておるぞよ」

おことばとは裏腹に、御坊は苦々しい顔をお見せになりました。

あのような顔をされたのは、最後の別れのときのみでございました。

三、双影（下）

「有王や、この衣をご覧。美しゅうございましょう」

姫君はおのが袖を手繰った。

有王が深く頷く。姫は悲しげにほほえみ、話し続けた。

「かつての頃のように着飾っているのは、父さまがいつお帰りになられてもよいように。帰りてわらわを見、落魄させたと嘆かることのないように……伯母は迷惑千万、厄介者よと陰言を申されておりまする」

姫の頬に涙が伝う。

「されど心を強うして、こんにちまで」

「おひい（姫）さま」

「……彼岸におわしやるなら諦めもつこう。されど、されど……」

姫は絶句し、両の手でおもてを覆う。ととさま、ととさま、と声を殺してすすり泣く。そのあわれな姿、見るに堪えぬと有王は顔を背けた。

御坊よ、なにゆえ「ほんとうを告げよ」と申された。

有王は姫と会いまみえる前まで、迷っていた。作りごとのいまわの言葉を考えていさえた。されど、華やかな単衣の裾を払う姫の前に、「もしや父上さまのことなど忘れしか」——その口惜しさが、有王に「ほんとう」を告げさせたのである。それもいやしき者の短慮であつたと、有王は唇を噛み血の味を嘗め、心のうちでおのれを責めた。

庭で郭公が鳴いた。ほーう、の声は長く続き、やがて消えた。

傾きはじめた陽光が、御簾を通り、床に細やかな筋目を描いている。

「わらわは」

有王は再び姫を見遣った。両手を膝に落とした姫は、険しい目を有王に向けていた。

「わらわは父さまのお弔いをいたします」

はつと眼を開き、有王が鋭く言う。

「おひいさま、さては」

「剃髪致しまする」

「いけませぬ、お聞きくださいませ」有王はとどめるすべを懸命に考えた、「御坊は平家に羽虫のようにうち払われ、苦悶の果てに卒されたのではございませなんだ。都を未練に思う煩惱を捨て、極楽を見いだしたのでございます」

有王は思うままをことばにしつつ、はたを目を見張った。さあるべし、これぞまさしく御坊の真意なりと——平家憎しと思うでない。いつまでも未練に迷うは負けたと同じ。たかが一平家ずれなどに。なればこそ、俊寛は僧都の名や衣鉢を投げやり、都の梅花も忘れたのだ。されどそれは、むすめをも見捨てることになる。これだけはどうしようもなく悔やまれる——なれば俊寛は、苦々しげに目を伏せたのだ。

姫は虚空を見つめてつぶやく。

「まるで補陀落渡海されたよう」

「生きて仏となられたのやも。目出度きことでございます」

「なればわらわは、その尊き徳を偲び、仏に仕える身となりまする」

「なんと」

「もはや父さまは還りませぬ」

ああ、と有王は嘆息し、ようやく悟った。

姫は待ついわれを失った。後ろ盾のない姫君に行く末はない。寺に行くより他はない。いかに説いても姫の翻意はならぬであろう。

「では私も」有王は重々しく告げた、「私も山へと参りまする」

「なにを申される」姫が悲鳴を上げた、「かようなこと、わらわのみで充分じゃ。父さまは未練を残さず、彼岸へ参られた。それを伝えたは有王、そなたぞ」

「御坊のことにあらず」

「では、なにゆえに」

「おひいさまにかような辛き思いをさせたることこそ、憎らしい。
ええ、平家が憎らしゅうてなりませぬ」

「おお……おお、有王」

姫は袖で目許を覆った。

「ゆえに三井寺に入ります。おひいさま、ご覧めされ。いつの日
か有王は平家に一矢報いてみせましょう」

有王もきつと翻意はすまい。姫もまた、分かつていた。

「有王や、わらわに約してくりやれ」姫は弱々しく微笑んだ、「武
運つたなき時も、いのちを粗略にせず、だれも恨まず、生きながら
えてくりやれ。父さまのように」

傾いた日がふたりを包み、ふたつの影を長く長く、伸ばしていた。

艶やかな単衣の姫が告げている気がした。

——平家は滅びた。そなたが誓うたとおり。

二のあるじと定めた人は、壇ノ浦に平家を沈めた。かのいくさに
付き従ったかれは、誓いの通り、平家に一矢報いたのである。

しかしそのあるじは今、鎌倉より追討を受ける身となり果てた。

一のあるじが海の果てなら、二のあるじは陸の果て——奥州行の主
従より離れ、かれは「慮外者」と呼ばれる道を選んだ。それは幼き
日、一のあるじの姫と約した、あのことばのためであった。

——この罪深き身、辛うござります、御坊……されど……

法師は潤んだまなこをそのままに、口元をゆるめた。

——おひいさまが、ここにおわしますれば……

そして再び、ただ漕いだ。

頬に流れる幾筋の涙は海の風が乾かし、やがて跡だけを残して消
えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4721c/>

俊寛三題

2010年10月8日15時16分発行